

[成果情報名] 生育期間延長による二・三番茶多収栽培の連年実施が一番茶に及ぼす影響

[要約] 二・三番茶の多収栽培を複数年繰り返しても、一番茶の収量および荒茶中の全窒素含量への影響は小さい。

[キーワード] チャ、生葉収量、全窒素含量、多収栽培

[担当] 農林技術開発センター 農産園芸研究部門 茶業研究室

[連絡先] 電話（直通）0957-46-0033

[区分] 茶部門

[分類] 指導

[背景・ねらい]

近年ドリンク茶の消費が増加したことや、茶の機能性が評価され、ドリンクや高機能発酵茶などの原料用茶葉の需要が増加している。そこで、価格の低い二・三番茶を原料用として多収する栽培体系が、一番茶の収量・品質へ与える影響を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 二・三番茶の収量は、生育日数を延ばすことで大きく増加する。また、翌年一番茶の収量への影響は小さい（図1、2）。
2. 多収穫で三番茶まで摘採しても、一番茶の全窒素含量は全区ほぼ同等であり、多収穫の摘採による影響はない（表1）。

[成果の活用面・留意点]

1. 一番茶は適期に摘採し、二・三番茶について適期の摘採および適期の摘採日より5日後および10日後を目安に、生育期間を延長して摘採を行った結果である。
2. 茶業研究室内圃場で、栽培条件は、やぶきた無被覆、年間窒素施用量45Kg/10a（年間7回分施）での結果である。また、2005年に中切り更新を行っている。
3. 中切り更新後4年を経過し、樹高の上昇と全体の収量の減少が見られたため、2009年二番茶後に浅刈り更新を行った。このため、2009年の三番茶は摘採していない。

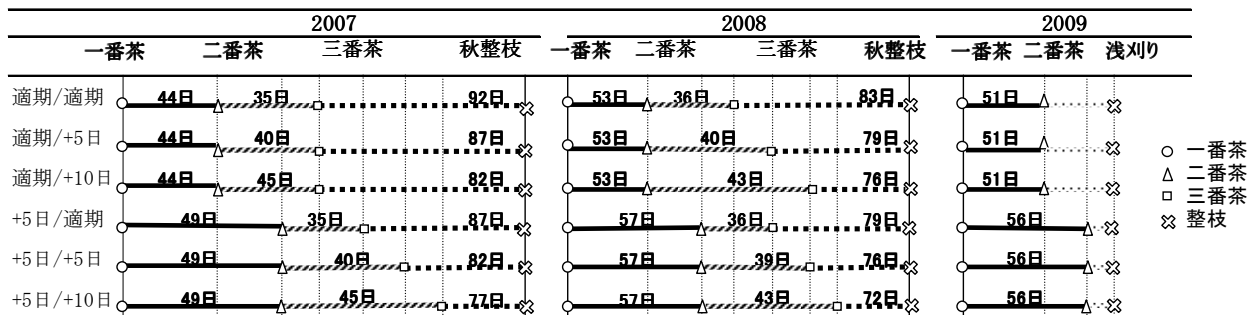


図1. 試験区的设计 (摘採日)

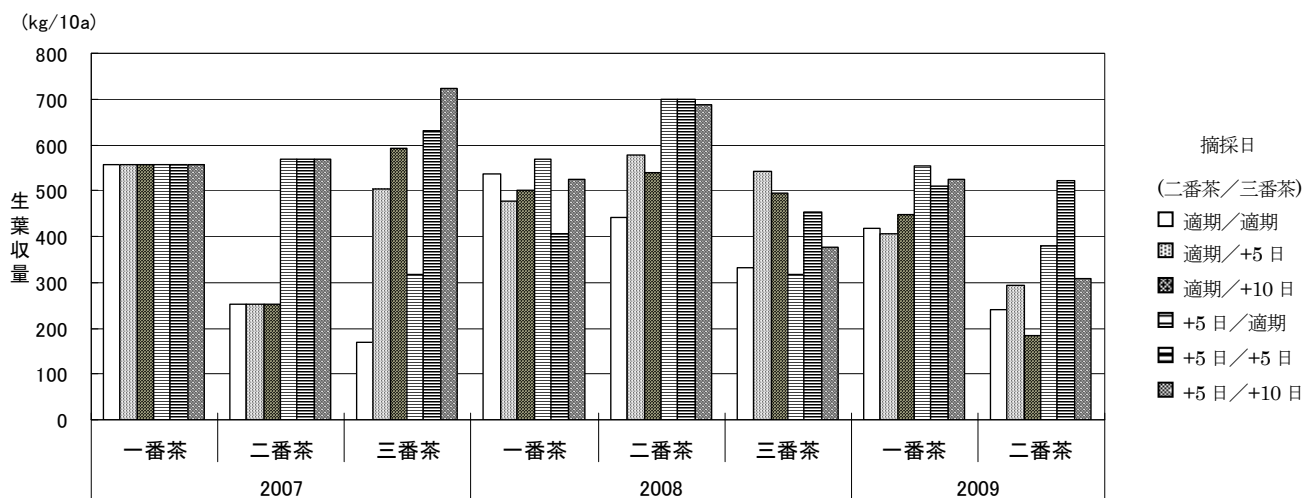


図2. 二・三番茶の生育期間の違いによる各茶期の生葉収量の推移

注1) それぞれ+5日は適期から5日後、+10日は適期から10日後を目安に摘採した。

表1. 二・三番茶の生育期間の違いによる、各茶期の全窒素含量と一番茶の収量(3ヵ年)

	一番茶 (乾物%)	二番茶 (乾物%)	三番茶 (乾物%)	一番茶収量 (kg/10a)
適期/適期	5.7±0.5	4.5±0.3	4.1±0.3	503±74.4
適期/+5日	5.8±0.5	4.4±0.1	3.4±0.2	480±74.5
適期/+10日	5.8±0.5	4.3±0.3	2.9±0	502±54
+5日/適期	5.7±0.6	4.1±0.4	3.9±0.1	559±8.1
+5日/+5日	5.8±0.6	3.9±0.1	3.4±0.1	491±77
+5日/+10日	5.8±0.6	3.9±0	2.7±0.1	534±18.5

[その他]

研究課題名：多用途茶葉大量生産と簡易製造技術の開発

予算区分：県単

研究期間：2007～2011年度

研究担当者：川本 旭、野田政之